



名誉理事長

ジョン・ジョセフ・シーランド



最近の RASA の活動について少し申し述べたいと思います。まずその前に皆さんが何気なく、いとも自然にお祈りをするのと同じように、RASA に資金的支援のご協力を続けてくださっていることにお礼を申し上げます。このご支援があるからフィリピンの人々のための活動が続けられているのです。感謝です。

先回7月のニュースレター発行以来、私たちはフィリピン各地から学校建設の支援をいただけないかという要望や問い合わせで多忙を極めております。

RASA の代表者の藤井典夫さんと8月30日から9月の4日までフィリピンに出張いたしましたのでそのことについて申し述べたいことがあります。出張の第一の目的はマニラから車で南へ約2時間ばかりのラグナ州サウスビルにある大変大きな小学校での RASA が手を貸す運動Ⅱの支援で行っているフィーディング・プログラム（栄養失調児への給食支給）の確認でした。子供たちは50人ずつ2班に分かれて給食にあずかっておりました。食事の前に手を洗い、お祈りをします。それから食事を始めます。私が驚いたのは、彼らの殆どが食べ始めると、顔を上げることもなく、ただ黙々と空腹を満たしている姿でした。そして彼らは希望すればお代わりは何度もできるということでした。藤井さんにとると、彼らの多くは一日のうちで、この食事だけしか口にできていない子供が多いと聞いて目頭が熱くなりました。食事が終わると彼らは感謝のお祈りの言葉を唱えます。「なんと先生方やプログラム・マネージャーがきちんと、そして清潔にそして整然と進めていることか」という印象を強く受けました。ルソン島北部のカンドン市でも同じようなプログラムを展開していることに触れておきます。

ここのご支援者もやはり「手を貸す運動Ⅱ」代表の佐藤正明氏なのです。給食活動視察の後、私たちは、来

年の2月に学校建設をする学校の校長先生ベルト・ラビガン氏を訪ねました。学生の作業やホーム・ステイの条件のすり合わせや、ホーム・ステイ生活におけるホストの役割など有意義な話ことができました。

校長は、「ボランティア学生を温かく歓迎いたします。特に各ホスト・ファミリー選考には、よりふさわしい家庭を紹介することは当然、特に安全について心配されると思いますが、治安は良いところでありますので、学校、地域、PTA が責任を持って対応するので安心して来てください。」とのことでした。

マニラに帰って翌朝、5時間かけて今年2月に学校建設活動をしたリングエンのパンガシナンへ向かいました。到着すると習慣になっていて、まず新しい校舎を見ます。当然ですがボランティアの学生たちが暑い中で活動した新しい校舎が建っていました。我々ボランティアが帰国した後は、専門の建設業者たちが普通4~5か月かけて完成させます。藤井さんと私はマニラに帰るとき新しい校舎の鍵を校長先生に手渡す式典と、この校舎を利用する生徒たち先生たちの幸運と健康を願って全ての教室を清める儀式をしきたりに則り行いました。

その夜遅くマニラに戻りました。次の日は土曜日でした。二人とも忙しい日となりました。藤井さんは、RASA を支援してもらうために幾人かの現地日本人に会うため、マカティー市やアラバン市に動きました。

私は一日中 ASI と呼ばれているマニラの下町のビルの一室で過ごしました。2003年に私とフィリピンの女性とでスタートさせた NPO 法人 Mother Laura Gertrude Seland Foundation。ここの会員は、いかに救いを必要としている人たちを助けるかを決めます。年に一度の年次総会に私も参加します。この総会は大切な決定をし、将来に向けた計画を決める素晴らしい機会なのです。翌日曜日、名古屋に向けて帰国の途につきました。この出張で沢山の人たちと会えたことと神様の助けがあって全てがうまくいったことに感謝をいたしました。私は RASA を温かく支援していただく皆様方のために祈りたいと思います。皆さん方一人ひとりに豊かな神様のお恵がありますように！

理事紹介



山本 良治 さん

ニュースレター発行に際し、自己紹介させて頂く事となりました山本です。

私がこのNPO法人 RASA-Japan にかかわるきっかけは、カトリック平針教会で実際にフィリピンへ訪問された学生さん達の体験報告会が行われ、その内容を聞かせて頂いた事が発端でした。フィリピンの十分ではない教育環境改善を図る目的で、教室不足の地域に校舎建設を行う為、多数の大学生ボランティアを50人程度募集しフィリピンの一般家庭にホームステイしながら建設体験されます。建設資金は当NPO法人の主旨に賛同された多数の方の寄付金で賄っているようです。私のようなパソコンが苦手ですが、何かできる事を探して協力して行きたいと考えております。

終戦の年に生まれた私の時代は、子供の頃は特に物がありませんでした。所どころに、焼けただれた建物が、そこかしこに残っていた東京の景色を今でも鮮明に思い浮かべることができます。小学校に通っても二部授業が行われて、一週間ずつ交代で午前部、午後部に分かれて授業を受けたこともあります。勿論給食などは有りません。貧しい家に育った割には何の不満もありませんでした。

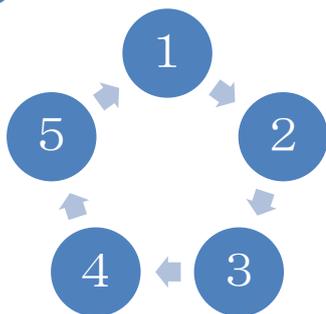
母親が着物の反物を背負って農家を訪問しながら売り歩き、その帰りに食料の野菜やらお米等を買出ししている姿が今でも思い出されます。小学校の上級生になって、一度だけ親父に新宿 末廣亭(寄席)へ連れて行ってもらった事があります。その頃は「志ん生」「小さん」「圓生」「三木助」「文楽」など昭和落語界の名人と云われた噺家が大勢おられました。そんなことが縁で、社会人になってからも上野「鈴木」新宿「末廣亭」「紀伊国屋寄席」「三越名人会」など会社の帰りに寄席に通ったものです。

今は名古屋に住んでいますので寄席は行かなくなりましたが、安藤鶴夫が書いた落語の本などを読んでいる時が、至福となっております。書かれた文章を読むと各々の演者の声が蘇ってくるのです。

その他に囲碁、コントラクトブリッジ(トランプ)などで楽しんでます。囲碁は「形」ですが、ブリッジは「コミュニケーション」を問われるゲームです。どちらのゲームも奥深いものがありますが、機会があれば是非お手合わせお願いします。今後とも希望と夢をもってゆっくり歩んで行けたらと考えております。

トピックス !

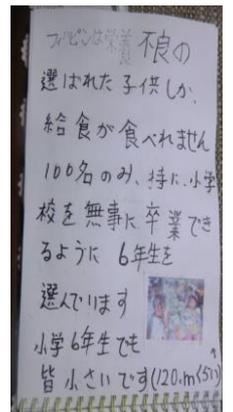
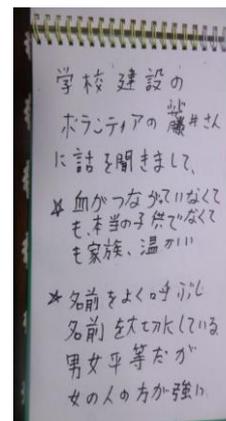
おばあちゃんから聞いていたフィリピンのことに興味を持ち、夏休みの自由研究にすため、RASAの事務所に取材に来ました。調べたことを「フィリピンの6年生の1日」にまとめた内容です。 山田 陸 くん 6年生



繰り返す貧しさ



- ① 幼児期不登校 読み 書き 計算ができない
- ② 成人期非正規、不安定な職にしか就けない
- ③ 収入がなく、必要な食糧が買えない
- ④ 栄養失調や病気で働けない
- ⑤ 子供に家事や子守、働かず→登校できず→①へ



活動報告 2016年7月～10月

7月

- 13日～18日 ・フィリピン出張カブヤオ市長、教育省等と協議
次期学校建設場所をママティッドに決定(来年2月)
・8月に予定している給食・スタディーツアーの準備
(マニラでのホテル、会食のレストラン、車両予約など)
(ホームステイ受け入れ希望者は多数, 家の状態はRASAの希望と乖離)
- 26日 ・スタッフ会議



カブヤオ市長訪問

8月

- 21日～27日 ・第1回給食・スタディーツアー(参加者の感想文参照)
(食事を待つ子供たちの行列に当初は戸惑いも感じた)
- 18日 ・南山大学カトリック教授会でRASAの社会貢献活動紹介
(会員約20名、予想以上の反響と質問に予定時間を超過)



テープカットする神父と理事長

9月

- 1日～4日 ・シーランド名誉理事長と理事長が新校舎落成、祝別式参加
- 5日 ・スタッフ会議



改築前校舎

<2017年2月の建設ボランティア募集説明会がスタート>

- ・ホームページやfacebookでもPRしました。
- 23日～ ・南山大学名古屋キャンパス、瀬戸キャンパス
・椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス、日進キャンパス
(枚挙できない回数、過去の参加学生が疑問質問に毎回真剣に回答)



改築新校舎

老朽教室 改築前

10月

- 4日～21日 ・南山大学の「宗教論」「キリスト教概論」の授業の冒頭30分、
ボランティア活動と参加募集PRを6回にわたって実施
(南山大ドミンゴス教授の教務課、神言会への働きかけで実現)
(椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス深谷教授、日進キャンパス山本教授の
RASAへの理解で実現)
- 22日～23日 ・ワールドコロボ・フェスタ参加(名古屋栄オアシス21)
(2016年ボランティアの学生たちが役割分担で支援、大盛況だった)
- 16日 ・カトリック平針教会(バザー出店による宣伝活動)
(特に、一筆箋、便せん、クリスマス・カードに人気集中)
- 30日 ・カトリック港教会(バザー出店による宣伝活動)
(フェアトレードのシーランド・ソーブ、ドライマンゴは完売した)



改築後安全きれいな教室



募集説明会



授業でのPR



バザー出店(港教会)



ワールドコロボ・フェスタ
(名古屋栄オアシス21)

RASA-Japan の事業推進

私たち RASA-Japan は事業の柱を次の三点に活動の主眼を置いています。

- 1 「フィリピンの子供たちに学校を！」
- 2 「栄養障害の児童に給食を！」
- 3 「日本の若者に異文化体験を！」

これまで、「奨学金支給事業」も事業の一つとして行っておりましたが、事情あって中断しており、本来の四つの事業から三つの事業を行っております。

これらの事業運営には多額の資金がかかります。幸いなことに、支援してくださる方々が継続的に寄付をしてくださり事業を中断することなく継続できる喜びを強く感じております。

◆ 特に二番目の「栄養障害児の給食」では、そのスポンサーが定まらず、自己資金のみでは運営が困難を極めました。運よく「モリコロ基金」の助成金申請に合格はしたもののその期間は一年限りで、継続をあきらめかけていました。ところが「手を貸す運動Ⅱ」の佐藤様ご夫妻の愛の手が差し伸べられ資金のめどが立ち、実施場所でも行きづまっていたところを、近くの小学校のアイダ校長の計らいがあって、学校の敷地の一部の提供がありました。栄養失調の子供達の命を救うことができました。フィリピンには学校給食という制度がありません。

「手弁当による通学」なのです。救済児童数も 24 名からスタート、現在は 100 名の児童が「手を貸す運動Ⅱ」のご支援によって救済されています。支援をしてくださっている

「手を貸す運動Ⅱ」の方たちも私たち RASA を支援して下さる資金調達のために、様々なイベントや細やかな活動を実行されています。例えば、「チャリティーコンサート in 町田」の興行や、佐藤さんの直筆による絵画をベースに制作された「カレンダー」「カード」「一筆箋」などを販売して得た収益金。支援者の方々にご寄付の呼びかけを行って得た資金など大変貴重な資金を私たち RASA は活用させていただいているのです。

佐藤さんご夫妻の活動の原点は、聖書の福音にある「善きソマリア人」のたとえ話のように、「あなたも行って同じようにしなさい」と言われたキリストの教えと伺った覚えがあります。



(Lend A Hand Movement II) のペナン

◆ 学校建設とボランティア活動の二つの事業は、一体の活動です。よくある他団体の海外ボランティア活動に、観光を目的にしたような単なる見学だけを主体にしたものがあります。ホテルを転々とした観光地巡りです。RASA が行っている事業は、学校や教室不足に苦しんでいる場所に行って、約 15 日間一軒の家の一人の家族になって、寝食を共にしながら昼間は学校建設活動で汗を流し、夜は家族との団らんで過ごします。

この間に、自分の家庭との違いに気が付くのです。朝、まず「お早うございます」と皆がニコニコしながら挨拶しあうところから始まり、全員がそろって「いただきます」・・・。

日本の生活では、家族は住んでいるけれど、てんでに起きて、てんでにご飯を食べて、てんでに出かけて、てんでに帰宅して、てんでに寝て・・・フィリピンのボランティア活動から帰国した女学生の話、「お父さんお早う！」と声をかけたら、「目を白黒」これをきっかけにお父さんと初めてじっくり話すようになったという「活動体験文集」を読んで毎年のことながら、苦勞し甲斐があったという実感に浸れるのです。

RASA で働いてくださっている方々は、全員の方が無料報酬で、交通費すら出せておりません。手弁当・・・。いずれ近いうちには、給料が出せるような団体になりたいと思っています。

円安が進み、フィリピンの物価は値上がりが激しいです。それ以上に学生の喜びは年々増えています。

第一回 給食スタディツアーの報告

期間 8月21～27日 **場所** ラグナ州カブヤオ市ニューガンサウスビル第1小学校 その周辺

参加者 大学生7名（男子2名女子5名）高校生女子1名（沖縄から）計8名とスタッフ1名の計9名

ホームステイ 従来1人1家庭だがここの住宅が狭く、学生受け入れ基準に合う数がなく、2名1家族が2組、5人が1家族で実施。

企画目的 この小学校は2011年 RASA が3教室を建設した学校で、現在の生徒数6000人とラグナ州最大の学校

2011年から少人数の給食を実施し継続。2013年から本格的に極貧のこの地で給食を開始。年毎に支援数を増やししながら児童の体位、出席率、成績等の実績に成果が出ている。今年含め3回学校建設活動した地域は比較的豊かな所でしたが、豊かな日本には決してわからない日本の学生に、この国の大部分の人が此処の様に貧しい状況下におかれている実情を見て、ここに身を置いて体験してほしい。それは困っている人々に思いをはせ、彼らのために何か行動を起こすきっかけになる。「人は自分だけでなく、利他のために役立つ」の精神に気づき人間的に成長してほしい。当たり前ではなく感謝することに気づく。純粋な子供たちやホストファミリーとの触れ合い。現地での家庭生活をしながら、食事支援をどのようにしているかを体験してもらうという狙いです。

5日 研修会 建設活動と同様（諸資料配布、滞在・渡航の心得、リーダー選出、ホストファミリー決定）

21日 中部国際空港からマニラへ。貸し切りバスで現地に向かう。学校関係者、ホストの出迎えを受け、校長代行でホストの代表にボランティアを各ホスト宅へ送ってもらう。19時頃よりホームステイ開始。

22日 6時学校着。7時半より全生徒による RASA 歓迎パーティーが盛大に行われる。事前の準備や授業の変更を思うと、感謝してもしきれない。8時半より給食作り開始（野菜の準備、調理、食器準備、配膳）。11時半から5年生50名、12時から6年生50名が給食室に来る。6人用テーブルを9個設置し満席。備品、調理器具、体重計身長計等、また食育のための展示物を壁面に掲示。扇風機を2台とミネラル水ボトルを設置。照明はなく少し暗い。全員が手洗いを終えて着席後にそろってお祈りをし、食事を開始。献立はごはん、7種の野菜と骨付き鶏肉の薄味の煮物。しばらくすると牛乳やスイカのデザート配る。フォークとスプーンで食事。食後には各自歯磨き。私たちが給食の試食をし、午後にはトライシクルに乗ってカブヤオ市へ食材の仕入れに行く。コーディネーターが公設市場、肉屋、グローサリーストアで買い物したが、保冷の準備がなく、長時間の買い物なので一考必要。どこの店も多品種、買い易かった。

23日 前日と同じ作業の後に、教育省の車で来年の学校建設予定地訪問。続いて地域見学（ホセリサールの記念館、教会、ショッピングモールなど）。校長先生手作りのサンドイッチは絶品。行き届いた学校の企画と配慮が有難く嬉しい。

24日 朝集合してすぐにリーダー発案により、翌日学校長に渡すノートに一人一人がお礼の言葉を記入。給食作業を終え、午後から4年生2クラスで学生による授業。折り紙、日本語、英語、タガログ語での言葉の学び。子ども達の目がキラキラ輝き、学生自身にも貴重な体験ができたあつという間の50分間

25日 活動最終日。日本食を知ってほしいと、いつものご飯を海苔のない塩おにぎりで提供。夕方から全生徒が集まりお別れパーティーが行われる。その際、校長先生からボランティア皆に記念プレートが配られる。

26日 別れを惜しみながらバスに乗り込む。観光地タガイタイを訪問し、昼食後マニラへ。ホテル到着後予約したレストランで最後の食事会、サプライズで誕生祝を企画。盛り上がり親交を約束。学校や各ホストも各々のやり方でボランティアを温かく心からもてなしてくれた体験などを話し合う。

27日 10時ホテル発、20時過ぎセントレアで解散。短期間でも中身のあるツアーで、学校長の配慮に本当に深謝。



初めての給食ステーション実施 体験学生の声から

参加の動機

A. F.: 将来発展途上国で、給食を通して子供達の健康を守りたい。その夢に一步近づけるプログラムと思った。

A. K.: アメリカに留学し、人種、言葉の違う子供達が同じ教室でいじめを知ったが、一月ではその子を救えなかった。貧困に苦しむ子供たちが食べ物を求めている。アメリカでしきれなかったことをフィリピンの子供にしてあげたい。

K. H.: JAICAで知った現地の子供たちとの交流が深められる。ホームステイ参加費の数字も現実的。実際に五感すべてで、リアルな姿を感じ取りたい。知りたい。

体験后感想文

I. R. 男 私は、今回のボランティアを通して「食で人と人を繋ぐ」という事を学びました。言葉も宗教も生活環境も日本と全く異なるフィリピンで「食というツール」を利用して人と人との結びつきを作ることが出来ました。

まず、給食室に入り目に止まった物は、給食のメニュー表でした。これは、日本の小学校にも見られる光景です。最も驚いたことは、味付けが日本と似ているという事です。又、日本よりも多く米を食べています。初めて、フィリピンのお米を口にしましたが、大変美味しかったです。

生徒は、6000人もおり最初見た時は、圧倒されました。これだけの子供がいれば、何か才能を持っている子供が多くいるはずですが、しかし、日本と比べ才能を導き出す環境が整っていないと思いました。その一つとして、学校にグラウンドが存在しないという事があります。私が小学生の時は、グラウンドが大きな遊び場であり、体を動かしていました。しかし、フィリピンの小学校では、下がコンクリートで出来ている為、思いっきり体を動かすことが出来ません。その代わりに、ダンスをよく踊っているのを目にしました。正直、私が行って子供達にたいしたことは出来ていないですが、私達が行き子供達と接することで、子供達にとって大きな意味があると感じました。

私は、今回ホームステイを初めて行い、ホストファミリーを初めて持ちました。今回のボランティアでは、フィリピンの人々の優しさを肌で感じました。本当に、ホストファミリーは家族のように接してくれました。これが、今回最もボランティアに行ってきたと感じたことです。私は、「食で人と人を繋ぐ」という事で、給食では「おにぎり」を握り、日本食文化に接してもらいました。ま

た、ホームステイ先では、フィリピンのお米を生かした「チャーハン」「ハンバーグ」を作り日本人が作る料理、味に接してもらいました。わたしは、今回ホームステイ先で、フィリピン料理をはさみ、多くの会話をしました。そこで、「食で人と人を繋ぐ」という事を実感し学びました。

今回のボランティアから、
多くの経験をし、
ものを見る視野
がまた広がりました



I. M. 私はこれまで何度か”ボランティア”というものに参加してきました。その中で毎回強く思うことは「自分の無力さ」です。栄養失調の子供たちに給食を作るボランティアをしにフィリピンまで来たのに実際にやったことと云えば、食器を拭いたことと野菜を切ったことくらいです。実際に運営しているのは先生方であり、思い返せばわざわざ野菜を切る作業の沢山あるメニューを選んでくれていたのかな、とも思いました。ボランティアに来ているのに、何の役にも立ってないんじゃないか、逆に迷惑なんじゃないか、と思うことがたまにあります。

今回もホームステイをする中で、子供たちの貴重な勉強時間を削ってしまったたり、もしかしたら自分のやっていることはただの偽善なのかな、とったりもしました。

それでも”その人にしかできないこと”はきっとあって、今は今の自分にできる事を精一杯やればいいのかと思えました。改めて、ひとつのことをやり遂げるにはたくさんの人の協力が必要で、1人でできることには限界がある、と強く感じました。フィリピンは今回で3回目だったので、少しは頼ってもらえるように頑張ろうという気持ちで参加しました。初めはみんながトイックルやバロットに驚いているのを見て初々しいなあと余裕をかましていました、そんなのはその時だけでした。相変わらずリエンダの量はすごかったし、シャワーのたびに日本に帰りたいたいと思いました。特大サイズのゴミが毎日出て、かさねちゃんと毎日大声で叫びました。ホテルのバスがいつまで経っても迎えに来なかったことや、洪水した道路をずぶ濡れになりながら渡ったことも全部いい思い出です。

また、藤井さんの配慮で以前のホストファミリーに再会することもできました。みんなとフィリピンに行けてよかったです。ありがとうございました。

S. S. 男子 「感謝」

春のボランティアが終わった時と今回のボランティアが終わった時を比較して自分が抱いた感想で一番違うものです。ボランティアを終えた今、「感謝」の気持ちでいっぱいです。僕は、春のボランティアに

参加したとき、人生で一番楽しい日々を過ごすことができました。そんな日々を過ごすことができたのは、もちろん関わってくれたすべての人のおかげで、「感謝」の気持ちがありました。しかし、自分自身を振り返ってみて、自分が何か残せたのか、何かの役に立つことができたのか考えたとき、もっとできることがあったのではないかと思います。このモヤモヤを解消したい。主体的に、自分自身のすべてをボランティアに注ぎたい。そんな思いで今回のボランティアに参加しました。僕は、リーグ-に立候補しました。リーグ-なんて人生で極力避けてきた役割で不安でいっぱいでした。リーグ-としては、反省点だらけで、自分って駄目だなと思うことだらけでした。それでも、良かったと思いました。ボランティアは一人でやるわけではないから。藤井さん、ボランティアのメンバー、学校の先生たち、現地の人々皆の力を借りて、なんとか無事にボランティアを終えることができました。自分一人の力ではできることに限界があっても、みんなの力を借りればその限界を簡単に超えることができる。だからこそ、みんなに「感謝」を忘れてはいけなと感じました。僕は、足を虫に刺されて病院に行くハニングに見舞われました。くるぶしが行方不明になるほど青く腫れて、正直めちやくちや痛かったです。そんなハニングを通じてフィリピンの人々の優しさに触れることができました。学校の先生たち、叔父ファミリー、病院の先生たち皆が本当に心配して下さい、色々な声をかけてくれました。みんなのおかげで、無事、足の腫れがひき、回復しました。その優しさに感動し、本当に現地の人々に「感謝」です。日々の生活に「感謝」しようと思いました。僕たちが当たり前のようにしている生活は決して当たり前ではないことを改めて認識しました。学校の給食を本当においしそうに食べる子供たちの姿を見て、ごはんを残さずに食べようと思いました。ごはんを食べることができるというのは当たり前のことでなく、世界にははっきり食べることができない子供がいるということを忘れないようにしようと、だからこの今の生活に「感謝」しなければいけないと強く思いました。結局、今回もたすけられてばかりでほんの少ししか貢献できていないと思います。でも、本当に素敵な日々を過ごすことができ、「ありがとうございました」

H. A. 女子



私は、今回長期の休みを利用して友人の紹介で参加しました。初めての東南アジアで、テレビでしか見たことのない様子を実際に見てみて、加減ショックを受けました。しかし、それ以上に驚いたことは、人々の温かさです。近所で同じ職場に行くと言って

車に乗りあったり、近所の子供たちがよく家に来て一緒に遊んだり、夕飯が余ったら近所の人にあげたりなどにかくみんな助け合っているということがよくわかりました。また、それが当たり前のようにみんながみんなやっていたので驚きました。もう一つ驚いたことは、子供たちの目が輝いていたことです。私達日本人がいると興味津々そうに、近づいて来たり、手を振ってきたり、サインを求められたり、その時いつも目が輝いていました。給食の時間になると喜んでやって来て、すごい勢いでおいしそうに食べる姿を見て、見ている私もうれしくなりました。

また、私たちが授業をやった時、折り紙を真剣に取り組み、手裏剣が完成した時には全員が笑顔になっていました。ひらがなの勉強をした時には、自分の名前をひらがなでみんな必死に書いていました。その時も自分の名前はどうか書くの?などみんな積極的に取り組んでいました。もし逆にこれを日本の小学校でやるとなると、こんなにも真剣にやるだろうか疑問に思いましたが、たぶん接してくれないと思います。フィリピンの子供たちはみんな学校が大好きで、学ぶことが大好きで、いろいろなことに興味を持ち、何事も楽しんでやるから目が輝いているのかなと思いました。しかし、日本との相違点は、子供の人数に比べ学校の数が少ないため、5,6年生以外は午前中で授業が終わってしまったり、幼稚園では12時~15時、15時~18時と2部にわかれているという点です。こんなにも子供たちは生き生きと勉強しているのに学校の数少なく、日本の子供たちの半分の時間しか勉強できないと考えるともっと学校の数を増やし、もっと勉強できる環境を作るべきだと思いました。また、日本の小学生に比べると、どう見ても小さい子供ばかりでした。学校では給食を食べられても家では栄養の取れる食事ができていない子供が多いのかと思いました。フィリピンでは、人々の温かさを感じました。日本人も温かい心をもって思っていました。フィリピンの人々はそれ以上の温かさを持っていると今回訪れて思いました。それは今後日本人が忘れてはいけない大切なことだとも思いました。初めて発展途上国と呼ばれている国を訪れましたが、私が出会ったフィリピン人は皆豊かだと感じました。それはきっと心が豊かでそれが周りの人も豊かにするのではないかと思います。今回1週間という短い時間でしたが、あっという間で密度の濃い時間でした。何より出会った人に感謝したいです。フィリピンという国、人が大好きになりました。日本にはないことを学ぶことができ、本当に良かったです。子供たちに会えて、学校の先生、叔父ファミリーに出会えて本当によかったです。

給食活動による成果

RASAの支援の柱の一つは欠食児童への給食活動です。

下の表は給食活動の、フィリピンから月ごとに送られてきたデータの5年生の一部です。

NUTRITIONAL SYTATUS FOR JULY GRADE FIVE PUPILS

DATE OF MEASUREMENT: July 11, 2016

	Names	Birthday	Weight (kg)	Height (m)	Height ² (m ²)	Sex	Age		Body Mass Index	Nutritional Status
							y	m		
1	Abaquita, Edryan L.	2006/3/10	22	1.28	1.6384	M	10	4	13.40	Wasted
2	Abad, Mariane	2006/1/18	20	1.28	1.6384	F	10	5	12.20	Severely Wasted
3	Alarcon, Guillian	2006/5/26	21	1.32	1.7424	F	10	1	12.00	Severely Wasted
4	Albani, Ritchei Anne	2006/9/19	20	1.29	1.6641	F	9	9	12.00	Severely Wasted
5	Andaya, Genrick T.	2006/4/10	20	1.25	1.5625	M	10	3	12.80	Wasted
6	Aya, Reina G.	2006/9/13	20	1.25	1.5625	F	9	9	12.80	Wasted
7	Bacayla, Maria Manel	2005/9/14	19	1.24	1.5376	F	10	9	12.30	Severely Wasted
						M	9	11	12.30	Severely Wasted

★ Names : 名前 Birthday : 誕生日 Weight : 体重 Haight : 身長 Haight² : 身長の2乗 (指標計算に必要) Sex : 性別 Age : 年齢 Body Mass Index : 肥満度測定の指数 Nutritional Status : 栄養状態

7月～9月についても上と同じようなデータがあります。

5年、6年夫々男性25名 女性25名 が載せられています。(合計100名)

それぞれの表について個々の体重を比較するとすべての児童に体重の増加が見られますが、データも多いので、ここではこの表の最後に載せられている下のデータを比較することにしました。

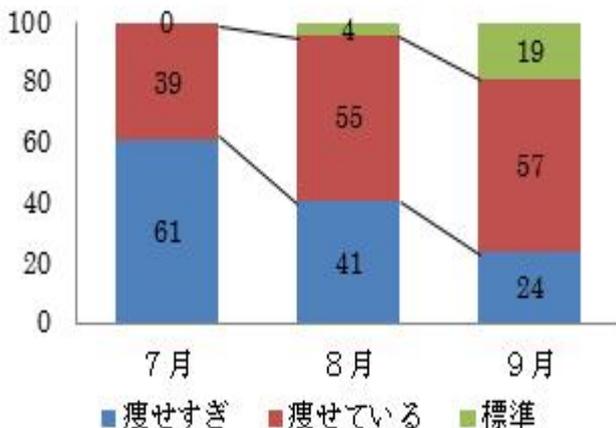
No. of Cases: Male: 29

SUMMARY	Male	Female	Total
Severely Wasted	15	11	26
Wasted	10	14	24
Normal	0	0	0
Overweight	0	0	0
Obese	0	0	0
Total	25	25	50

NOTE: Based on the Automated Program for BMI per Level

SUMMARY : 摘要
 Male : 男性 Female : 女性
 Severely Wasted : 痩せすぎ
 Wasted : 痩せている
 Normal : 標準
 Overweight : 太りすぎ
 Obese : 肥満
 Total : 合計

注 : フィリピン児童の体位標準表に基づいている



注

グラフの縦軸は人数
 数字は7～9月の5, 6年男女の合計 100名
 痩せすぎ、痩せている、標準 夫々の人数も記入
 太りすぎと肥満の該当者はありませんでした

痩せすぎが7月では**61**人であったのが9月では**24**人に減少しています。

痩せすぎから痩せているに移項しているのがわかります。また標準が7月に比較して9月は**19**人も増加していることがわかります。このように体重の増加が明らかで、給食指導の成果が出ていることがわかります。

今後も学校の児童への継続的な食育、衛生指導を通じ、それを児童が家庭においても親に伝える等によって食事というものへの知識や取り組みが伝わり徐々にいい方向に変わってきているのではと思われます。給食も1日の昼だけ、土、日は休みで給食がない。食事の回数から給食だけでの影響ではないと思われます。短期間でこれだけの成果が見られることは素晴らしい成果です。次回は、月別のデータも増えますので、児童個々についての体重増加の記事を予定しています。

RASAが僕を変えてくれた

南山大学英米学科4年 原 健心



私はこれまでラサのボランティア活動に3回参加しました。私には特別な事情があり、自分自身を変えたいと思い参加に至りました。私が中学三年生だった時、家族に不幸があり私は高校に進学するのを諦めました。それから私は大学に入学するまで家族以外の人とは誰とも接触をせず、自分自身の中の心の時計はそれ以来止まったままでした。大学に入学できたものの、失われた時間は私にとってとてもとても大きく、うまく人間関係を作ることができず大学を何度もやめようと日々悩みました。しかし、「自分自身を変えたい。このままではいけないんだ。」と自分自身に言い聞かせ、ラサのボランティア活動に参加しました。海外でのホームステイ、学生との建設活動など、より近い距離で人と接し人間の温かみを感じたのと同時に「人間はいろんな人と繋がっていて、お互い支えられて生きているんだ」と実感することができ私の中の止まっていた心の時計が動き出した瞬間でした。私は人生の早い時期に挫折を経験してしまいましたが、こんな私でも立ち上がり、今も前を向いて生きて行けるのもラサのボランティア活動に参加し、素晴らしい人たちに出会えたからだと思います。たとえ困難な状況に直面しても自分自身が前を向いていれば明るい未来を切り開くことができるとラサのボランティア活動は私に教えてくれました。

2017年2月の学校建設場所がハイスクールに決まりました

学校建設はRASAの大きな事業の一つです。どのような経緯で建設場所は決められるのでしょうか。時々、尋ねられることがあります。次の建設場所が決まったのを機会になぜハイスクールに決まったのかということに触れたいと思います。話は飛びますがフィリピンは「就学年限の国際基準」に2年短く、国の内外で批判されていたことからハイスクールを2年間延長しました。日本には「中学」という制度がありますが、フィリピンでは小学校からいきなり高校です。小学校から大学卒業まで、国際基準は16年間です。フィリピンは小学6年、ハイスクール4年、大学4年で14年間の就学年数です。フィリピンの人々は、外国で働くことに抵抗感はありません。国内の就労事情もあって、海外へ出ていきます。受け入れた国のクレームもあって議論の結果、2013年にハイスクールが法律で6年に決定してしまいました。たださえ教室の足りない教育現場は大慌てです。藤井忠子理事に昨年6月給食支援活動で出張してもらったとき、アイダ校長先生に教育省のエドナ氏に建設予定地の相談を持ち掛けていただいたところ、10月にカブヤオ市のグロッド・ナショナル・ハイスクールの推薦があり現地視察を経て環境や、治安状況など諸条件を確認し決定したという経緯です。



(2017年2月の建設場所)



(アイダ校長と藤井理事長)



(教育省での会議の様子)

フィリピンの事（愛知国際プラザ No.115 より）

第2次世界大戦で、日本軍の侵攻でフィリピンの方が100万人、日本兵も30万人が（殆んど餓死）亡くなってその後もいろいろお互い悲しいことがありましたが、それを乗り越え、戦後補償や支援を行いながら、国交正常化今年60周年を迎え、親交が増し両国の往来が活発化しています。



フィリピン共和国国旗のことをお伝えします。

色や形は次のことを表しています

太陽の8つの光—独立運動に立ち上がった8つの州

3つの星—ルソン、ビサヤ、ミンダナオの3つに分けた地方

赤い色—勇気 青い色—高い政治目的 白い色—平和

ご寄付のお願い

フィリピンでの学校建設を継続しておりますがハイスクールの就学期間が2年間延長され、ますます学校や教室不足の状態は深刻になっております。フィリピンの教育環境改善、自力できる生活力をつける教育を支えたいと活動してきたRASAは、毎年建設費として、最低500万円を予算計上しています。RASAは有力な資金提供者です。増設要望が多く来る中、願いをかなえたいと奮闘しています。皆様の支えがあってこそできる活動です。フィリピンの恵まれない教育環境の子ども達に、なにとぞ力をお貸しください。

ゆうちょ銀行から

他の銀行から【銀行名】ゆうちょ銀行

【振込口座】ゆうちょ銀行 00890-4-31185

【支店名】〇八九【口座種別】普通【口座番号】31185

【振込名義】特定非営利活動法人 RASA-Japan

【受取人名】特定非営利活動法人 RASA-Japan

編集後記

今年の世界の国々が、民族宗教の違いを超えて集うオリンピック開催という明るいニュースがあった反面、世界各地では民族宗教の違いによる紛争、テロが多発し、多くの犠牲者が出たくらいニュースもありました。そして紛争、テロの被害を最も蒙るのは、子どもや高齢者などの社会的弱者であります。RASA-Japanは紛争やテロの原因の一つは貧困、教育環境の不備と考え、その解消に努めてまいりました。

この活動を継続してこられたのも多くの寄付者の支援の賜物です。本年度も今回のニュースレターで、報告させていただいているように、フィリピンで教室の改築と100名の欠食児童の給食を与え、顕著な体力の向上を図ることができ、学校関係者はもとより、州政府などから多大な感謝をいただきました。今後もRASAのミッションにご理解いただき変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



特定非営利活動法人

RASA-Japan

理事長 藤井典夫

〒468-0014 愛知県名古屋市天白区中平2-2627

Tel/Fax 052-803-1649

URL <http://rasa-japan.com>

E-Mail info@rasa-japan.com